

**平成 16 年度厚生労働科学研究  
(子ども家庭総合研究事業)**

**報 告 書**

**平成16年度総括研究報告書**

主任研究者 **伊志嶺 美津子**

分担研究者 **櫃田 紋子**

分担研究者 **大豆生田 啓友**

(子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究)

**厚生労働科学研究**  
**(子ども家庭総合研究事業)**

**子ども家庭支援プログラムの  
開発に関する研究**

**平成16年度研究報告書**

**平成17年3月**

主任研究者 **伊志嶺 美津子**

分担研究者 **櫃田 紋子**

分担研究者 **大豆生田 啓友**

協力研究者 **新澤 拓治**

協力研究者 **藤井 和枝**

協力研究者 **田島 昌子**

協力研究者 **依田 幸子**

協力研究者 **早川 貴美子**

協力研究者 **佐川 寛子**

協力研究者 **相馬 靖明**

協力研究者 **武藤 陽子**

協力研究者 **奥山 千鶴子**

協力研究者 **大豆生田 千夏**

## 目次

I 研究の目的	
1. 子ども家庭支援の現状	1
2. 研究の目的	2
II 研究の方法	
1. ひろばにおける子ども家庭支援プログラム	3
2. 子育て支援研修プログラム	4
3. 支援職養成カリキュラムに関わる調査研究	5
III ひろばにおける子育て家庭支援プログラム	
1. ひろばでのプログラム実践	
1) ひろばでのプログラム実践	6
2) 実践報告の結果	7
3) 児童館視察調査から	11
2. 子育て家庭支援プログラムの提案	
1) 常設でノンプログラムの「ひろば」	13
2) プレママ・マタニティプログラム	16
3) 一時保育・相互預けあいプログラム	19
4) 親のエンパワーメントプログラム	23
5) 父親支援プログラム	27
6) 学生の子育て支援プログラム	33
7) 中高年世代との交流プログラム	41
8) アウトリーチプログラム	43
9) 企業との連携プログラム	46
10) ひろばでの相談	48
11) 情報提供プログラム	50
12) 児童館での支援プログラム	52
13) 特別なニーズへの対応プログラム	55
14) 支援者の研修	59
3. 子育て家庭支援プログラムを豊かに展開するために	
1) 子育て家庭支援プログラムの基本的な考え	63
2) ひろばのプログラム・その活動のあり方	66
3) 子育て支援者の役割	72
IV 子育て支援研修プログラム	
1. 研修プログラムの目的と作成方法	
1) ひろば型支援者の育成	79
2) 支援者研修に関するニーズ調査	80
2. 研修プログラムの作成と実施	
1) 研修プログラムのねらい	81
2) 研修プログラムの構成	82

3) 研修プログラムの実施方法	83
3. 研修プログラムの実際	
1) 第1回『ひろば型ファシリテーターとは』	84
2) 第2回『子どもへの理解と援助』	86
3) 第3回『親への理解と援助Ⅰ』	88
4) 第4回『親への理解と援助Ⅱ』	90
5) 第5回『ファシリテーターに求められるもの』	92
4. 研修プログラム実践の評価	
1) 研修プログラム実践による受講者（支援者）の変化	96
2) まとめと考察	97
V 支援職養成カリキュラムにかかわる調査研究	
1. 子育て支援の場におけるヒアリング調査から	
1) 沖縄県の支援センターの実践	98
2) 支援者に求められるもの	99
3) 支援者養成のための提言	102
2. 家族支援職養成カリキュラムの検討	
1) ファミリー・リソースセンターのスタッフ その資格と研修	104
2) ライオン大学の支援職養成課程	106
3) 履修8科目の概要	106
3. 日本における支援職養成とカリキュラムの検討	
1) ライオンのカリキュラムから示唆されるもの	116
2) その他、支援職養成に加えたいこと	120
VI まとめと考察	
1. ひろばにおける子育て家庭支援プログラム	121
2. 支援者の研修	122
3. 支援職としての専門性を養成するカリキュラムについて	123
4. 父親の育児参加のための提言	124
おわりに	127
巻末資料	
巻末資料目次	128
プログラム実施報告	129
支援者アンケート	221
支援者アンケート分析レポート	223
研究組織・構成員	226
執筆担当箇所	227

## I 研究の目的

### 1. 子ども家庭支援の現状

#### 1) 子育て支援策の状況

少子化対策に始まったわが国のいわゆる子育て支援は、2003年次世代育成支援対策推進法が成立、2004年度地域ごとの次世代育成支援行動計画の策定が進み、いよいよ2005年度のスタートを迎えることとなった。各自治体だけでなく、企業にも計画と行動が義務付けられたことに意義があり、計画の前半5年間にも子どもと子育て家庭の状況に変化と効果もたらされることに期待が掛かる。

従来、仕事と家事育児の両立を支援してきた保育に加えて、保育所は地域の在宅の子育て家庭支援のための「地域子育て支援センター」による地域の子育て支援を、幼稚園にも預かり機能が加えられて、保育現場が中心的役割を担ってきた。そこに新たに加わってきたのがNPO等民間団体が始めていた「ひろば」を事業化した国の「つどいの広場事業」であり、地域の親子が自由につどい、孤立や閉塞感から開放され、子どもや子育てについての情報や知恵を交換できる場として提供されるようになった。

ひろばの設置や運営主体はさまざまで、その内容も多様であるのが現状である。従来の保育ではなく、またひと時のお楽しみを提供するイベントでもない、親子が自由に集う場ではなにをしたらいいのかへの戸惑いがある。ひろばにかかわるスタッフばかりか参加してくる親自身にも、その意義が理解されるまでは戸惑いがあった、あるいはあるというのが実情である。こうしたひろばにおける「ノンプログラム」というプログラムについて、またひろばで展開するプログラムのあり方について考察し、具体的なプログラムを提示したのが、前年15年度の研究であった。

本研究は2年目として、先に提案したプログラムを検証し、現場で使用しやすいものへと再編することを主目的とするものである。

#### 2) ノンプログラムのひろば

ひろばは人が集う場であり、人が会うことによりさまざまな交流が生まれる場となる。子育て中の親と子どもが集うことにより、まず子どもにとっては遊ぶ場となり、子ども同士の交流だけでなくその親やスタッフという大人たちとの交流を体験する場ともなる。家で親とだけ過ごすよりはるかに豊かな経験、刺激を得ることとなる。

親同士の交流も盛んに行われて、先輩親やわが子より小さい子を持つ親とおしゃべりをして、気持ちを発散させると同時に必要な知恵や情報をもらう。親にとっても仲間に出会ってほっとし、助けをもらった気持ちになれる場なのである。

ひろばとはこうした交流が自然に生まれる場であり、そうした場にしていく見えない支援が必要なところである。単に場所があっておもちゃがある空間ではなく、親子が来て安心して過ごし、来たことによって豊かな何かを得ていく、来てよかった、また来ようと思えるものを提供しうる場であるといえよう。表面に見える形でいわゆるプログラムは進行していない、しかし来た人たちが心地よく、必要としている無形の何かを得られる場となるには何が必要だろうか。ノンプログラムとは、おもちゃや場所の設定というハードを充実させることも含めて、こうした場を作り出すソフト、すなわちスタッフのあり方、姿勢、親子へのかかわり方によって生み出される場の雰囲気などが非常に大きな意味を持つてくるといえる。

こうしたノンプログラムが根底にあつて、その上にどのようなプログラムを提供していくのかということで、前年に提案したプログラムは、それぞれ子育て家庭のニーズに合わせ、親の主体性を中心

に据えながら実施し、親自身が気づき、学び、力をつけていくことを狙ったものであった。今回はこれらのプログラムについて、実践をふまえて再検討をしたい。

### 3) 支援者に求められるものと研修

ひろばのスタッフや支援者には、親や子どもの主体性を尊重し、彼ら自身が行動し、判断し、自らの力で歩いていくことを脇から支えていくことが求められるだろう。そのために必要な場を準備し、その中で親同士が育ちあうためのきっかけや材料、情報などのリソース（資源）を揃えておくこと、自身もそのリソースになる、つまり親子のニーズに応え、必要な支えができる人であることが求められる。

親子のニーズはそれぞれ違う。その人が求めているものは何か、何が必要かをそれぞれ見取る力も必要だろう。それは単に答を求められたから、そのことを指導したり答えを出すことではない。その人自身が気づき、判断して決めていけるよう手伝うことが大切で、それがその人にとって必要なこととして対応していく力が必要だと考えたい。そのために、まず支援の対象となる子どもと親への理解を深めることが必要であろう。

子どもの発達とそのために必要なことはなにか、大人の役割などを理解することに加えて、子どものその時々々の気持ちを理解することが求められる。子どもの行動からその気持ちについて、常に考え、理解しようとする姿勢や学びが必要である。

親である大人は子どものように気持ちを表さなくなり、それぞれ経験を積んでさらに複雑になっている分、理解することは困難となる。親の話に耳を傾け、じっくりかかわることではじめて見えてくることが多い。親の力を信頼し、一人ひとりのニーズを受け止め、親同士の支えあい、ピアサポートを促す場にしていくことが、親自身の発達にも繋がっていく。支援者にはいわばファシリテーターとし

ての力量が求められるのだろう。

ファシリテーターであるために必要なことの一つにその人自身の自己理解、自分がどういう人間であるかということへの理解がある。支援者研修には自己への気づきを促す内容も盛り込みたい。

### 4) 支援職養成カリキュラム

現段階ではひろば等のスタッフにはとくに専門性や資格が問われてはいない。今後ひろば等が増える見通しの中で、そのソフト、内容が問われていくことも予想される。その結果必然として支援者の専門性や必要な力量が問われてくるだろう。

カナダのライアソン大学では家族支援職の養成課程を開講しているが、そのカリキュラムを紹介して、日本での支援者養成に示唆されることやその内容について検討したい。

## 2. 研究の目的

以上をふまえて、本研究は以下の3点を目的とする。

- 1) ひろば等子育て支援現場における子ども家庭支援プログラムの検討  
昨年度作成したつどいの広場等子育て支援の場における子ども家庭支援プログラムを現場で実践・検証し、再編する。
- 2) 子育て支援者研修プログラムの作成  
ひろば等で子どもと親を支援するスタッフやボランティア等の支援者の資質・技能の向上を図るための研修プログラムを作成し、検討する。
- 3) 支援職養成カリキュラムの検討  
カナダの「家族支援職養成カリキュラム」を紹介し、日本の大学における保育者養成等への導入について検討する。

## Ⅱ 研究の方法

### 1. ひろばにおける

#### 子ども家庭支援プログラム

平成 15 年度厚生労働科学研究「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」において、プログラムの提案を行った。今年度は昨年度のプログラムを実際にひろばで実践してもらい、検証、修正を行い、実施可能なものとするを目的としている。

そのため、先進的な取り組みをしている子育てひろばに対して、プログラムの実施とその実施結果の報告を依頼した。この報告を踏まえ、プログラムの修正を行った。

#### 1) 実施の方法と内容

##### ①期間

2004 年 10 月から 12 月までの期間にプログラム実施をお願いした。

##### ②報告内容

以下の報告を依頼した。

- ・実施担当者（かかわった担当者全員の名前とその立場・役割）
- ・実施日時、回数、実施場所
- ・実施対象者（人数、選出方法、特性等）
- ・実施の方法と内容（1 回ごとの詳しい内容と方法、展開について、具体的に記述する。）
- ・実施結果（対象となった利用者の声や感想。実施スタッフの感想について記述する。）
- ・評価ープログラム実施の意義と課題（プログラム実施にあたっての問題点や改良点がある場合、具体的に提案する。）

#### 2) 実施したひろばとプログラム

以下の 8 箇所プログラムの実施をお願いした。

##### ①江東区子ども家庭支援センターみずべ（東陽および大島）

- ・一時保育、相互預かり保育
- ・NP プログラム
- ・企業連携プログラム
- ・父親座談会
- ・赤ちゃんふれあいプログラム
- ・家庭訪問プログラム
- ・出張ひろば
- ・ひろばの相談
- ・傾聴（支援者研修プログラム）
- ・ロールプレイ（支援者研修プログラム）

##### ②ビーのビーの

- ・マタニティプログラム
- ・企業連携プログラム
- ・父親座談会
- ・中高年ボランティア
- ・学生の家庭育児参加プログラム
- ・ひろばの相談
- ・情報提供
- ・支援者のふりかえりミーティング

##### ③手をつなご

- ・マタニティプログラム
- ・相互預かり保育
- ・中高年ボランティア

##### ④くすくす

- ・親の自主企画講座
- ・広報
- ・特別なニーズへの対応

##### ⑤わははネット

- ・父と子の体験プログラム
- ・父親サークル支援
- ・情報提供

##### ⑥まめっこ

- ・一時保育
- ・出張ひろば

##### ⑦まんま

- ・親の自主企画講座

##### ⑧ あみーご

- ・情報提供

## 2. 子育て支援研修プログラム

つどいの広場等子育て支援の場が全国各地で広がり、多数の人々（スタッフ、サポーター、ボランティア等）が支援活動に携わっている。これら多種多様なバックグラウンドをもった支援者たちを視野に置いて、支援者研修のための基本的なプログラムを作成し、現任の支援者や支援者を志すボランティア等実践する。その結果を検討、今後の課題を析出する。

### 1) 子育て支援者研修に関するニーズ調査

研修プログラムを作成するにあたり先ず、地域の乳幼児を育てる家庭、子育て支援の場実際に携わっている現任の支援者を対象に「子育て支援者に関するアンケート調査」及びヒヤリング調査（山形県Y市2カ所）を実施し、その結果を分析し研修プログラムを作成のための基礎資料を得た。

#### (1) アンケート調査の対象

全国つどいの広場連絡協議会の関係者を対象に、支援者研修に関するニーズ調査の配布を依頼し、郵送による回収を行なった。回収率は20%弱ときわめて低いが、35名の有効回答をえた。

#### (2) 調査の内容

以下のⅠ～Ⅲの設問について記述してもらった。

Ⅰでは記入者の属性について、1. 子育て支援を行なっている事業 2. 子育て支援に携わる立場 3. 資格もしくは専門 4. 子育て支援の経験年数。

Ⅱでは子育て支援者に求められる資質・技能について、1. 子どもの発達支援 2. 親への対応 3. 相談 4. 家族の問題 5. その他、必要なこと。

Ⅲでは子育て支援者のための研修のあり方について、1. 必要と思われる研修内容 2. 研修の形態等（形態、頻度、1回の時間、費用、その他）。

### 2) 研修プログラムの作成と実施

支援者に関するニーズ調査の結果を踏まえて、「ひろば型ファシリテーター」の養成を目的とする、3日間5コマ、12時間半の研修プログラムを作成した。

#### (1) プログラムの構成

5つの学習テーマから構成されている。全体の枠組みの決定は、実践に際して講師を担当した5人の合議の上で行なった。

##### 第1回：

ひろば型ファシリテーターとは  
－ひろばの機能とスタッフの役割－

##### 第2回：

子どもへの理解と援助  
－子どもへのかかわりと環境構成－

##### 第3回：

親への理解と援助Ⅰ  
－親へのかかわりとひろば相談－

##### 第4回：

親への理解と援助Ⅱ  
－相談とカウンセリングマインド－

##### 第5回：

ファシリテーターに求められるもの  
－支援者としての自己理解－

#### (2) 実施方法

対象者は、現任の支援者及び支援者を志すボランティア等を併せて延べ40名。2005年1月～2月、3日間（土曜日）に実施された。1回の所要時間は2時間半、最終回のみ3時間を設定した。

#### (3) 実践後の評価

毎回、終了時にふり返り用紙を配布して、研修内容について学んだこと・気づいたこと・質問等を自由記述で求めた。各回ごとの受講者の記述を基に研修の成果について検討した。尚、実践終了1ヵ月後に実施したアンケート調査の結果も加味して考察する。



### 3. 支援職養成カリキュラムに

#### かかわる調査研究

支援者養成カリキュラムを考えるにあたって、日本の支援の現場の実践者が支援者に求めるものは何について、聞き取り調査を行った。その上でカナダのライアソン大学で開講する「家族支援職養成課程」について、入手資料を翻訳し、その構成および内容の一部を紹介した。

#### 1) 子育て支援の場におけるヒアリング調査

支援者の持つ専門性、必要と思われること、研修に取り入れていること、研修プログラム等について、訪問によるヒアリングを行った。その結果をふまえて、支援者に求められることおよび研修についてをIVにおいて、また支援者養成のための提言をVにおいて行った。

調査地 神奈川県 K市  
沖縄県 N市 O市 各1ヶ所  
山形県 Y市 2ヶ所

その他、カナダのバンクーバーおよびトロントのファミリー・リソースセンターで働くスタッフに、ファミリー・リソース事業におけるスタッフが持つ専門性および研修について、ヒアリングを行った。

#### 2) カナダのライアソン大学の「家族支援職養成課程」の紹介

現地のカリキュラムのテキストを入手し、その構成および内容について一部を翻訳し紹介した。

さらに現地で本課程を履修中の学生から、授業内容やそこでの体験、感想等について情報を入手した。

#### 3) 日本における支援職養成カリキュラムの検討

1)、2)の結果をふまえ、ライアソンから学ぶことを含め、日本で求められ、また必要と思われる支援職養成カリキュラムについて検討し、提言を行った。

### Ⅲ ひろばにおける子育て家庭支援プログラム

#### 1. ひろばでのプログラム実践

##### 1) ひろばでのプログラム実践

平成 15 年度厚生労働科学研究「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」において、プログラムの提案を行った。今年度は昨年度のプログラムを実際にひろばで実践してもらい、検証、修正を行い、実施可能なものとするを目的としている。そのため、先進的な取り組みをしている子育てひろばに対して、プログラムの実施とその実施結果の報告を依頼した。

##### 期間

2004 年 10 月から 12 月までの期間にプログラム実施をお願いした。

##### 報告内容

以下の報告を依頼した。

- ・実施担当者（かかわった担当者全員の名前とその立場・役割）
- ・実施日時、回数、実施場所
- ・実施対象者（人数、選出方法、特性等）
- ・実施の方法と内容（1 回ごとの詳しい内容と方法、展開について、具体的に記述する。）
- ・実施結果（対象となった利用者の声や感想。実施スタッフの感想について記述する。）
- ・評価－プログラム実施の意義と課題（プログラム実施にあたっての問題点や改良点がある場合、具体的に提案する。）

##### 実施したひろばとプログラム

以下の 7 箇所にプログラムの実施をお願いした。

(1) 江東区子ども家庭支援センターみずべ（東陽および大島）

- ・一時保育、相互預かり保育
- ・NP プログラム
- ・親たちによる自主活動
- ・企業連携プログラム
- ・赤ちゃんふれあいプログラム
- ・家庭訪問プログラム
- ・出張ひろば
- ・ひろばの相談
- ・傾聴（支援者研修プログラム）
- ・ロールプレイ（支援者研修プログラム）

(2) びーのびーの

- ・マタニティプログラム
- ・企業連携プログラム
- ・父親座談会
- ・中高年ボランティア
- ・学生の家庭育児参加プログラム
- ・ひろばの相談
- ・情報提供
- ・支援者のふりかえりミーティング

(3) 手をつなご

- ・マタニティプログラム
- ・相互預かり保育
- ・中高年ボランティア

(4) くすくす

- ・親の自主企画講座
- ・広報
- ・特別なニーズへの対応

(5) わははネット

- ・父と子の体験プログラム
- ・父親サークル支援
- ・情報提供

(6) まめっこ

- ・一時保育
- ・出張ひろば

(7) まんま

- ・親の自主企画講座

## 2)実践報告の結果

7箇所ひろばからの実践報告から得られた結果は以下の通りである。なお、報告書の実際は最後に資料として添付した。

### (1)プレママ・マタニティプログラム

#### ①びーのびーの

妊婦およびその家族を対象とした参加型マタニティクラス実践の報告がなされた。特に、地域の中での支え合い、育ち合いの場を提供することの大切さが報告された。

課題としては、ひろばで行う場合の広報、集客の難しさがあげられた。また、ひろばの日常の中で行われるような配慮の必要性もあげられた。

#### ②手をつなご

「プレママのためのおしゃべりひろば」の報告がなされた。スタッフや先輩ママとくつろいだ中でのおしゃべりを通して、出産について気軽に話し合う。また、赤ちゃんを抱いたり、おむつ替えをするなど、実際に子どもに触れることによる育児の期待と喜びを感じることの大切さがあげられた。

課題としては、やはり参加者が少ないことがあげられた。参加しやすい状況をつくることが求められる。

### (2)一時保育・相互預けあいプログラム

#### ①みずべ

##### ファミサポとひろばのドッキング

各地で行われているファミリーサポートの事業であるが、ひろばとドッキングすることでいくつかの利点が生まれ、そうした実例をあげている。むしろ課題としては預かりのコーディネートをひろば側がするわけではないので、その辺の調整がどうなるかでかなりやりやすさが変わってくることもわかった。

##### 講座の際の一時保育

親が学習的な活動をする際には、子どもの保育は欠かせない要素であるが、実際には物理的な環境要因や人的な課題(人手不足など)で実施するのが難しい場合もある。

またただ預かればよいというものではなく、子どもたちが安心できること、預ける側も安心できることの大切さなど、ボランティアなどでの実施が多い中、振り返りの時間などをゆっくりとる中で、それが学びの場になっていることが伺える。

#### 相互預けあい保育

ここでは単に人手としての預かりあいということだけでなく、貴重な体験学習の場としての相互預けあいとして位置づけている。今回の実践では一対一のペアでの実施であるが、それゆえきめ細かな配慮もでき、側面から支えるスタッフ、ボランティアも関わりやすい実践であった。今後はグループが成長しその中での実施や、お友達同士でといった展開に期待がもてる内容であった。

#### ②まめっこ

ひろば内(同室)で一時保育を行う実践が報告された。年間登録制、2日前申し込み、子どもの受け渡し、記録、1対1対応、1日2人、月曜～金曜まで9時～5時が基本時間等の具体的な方法が示されていた。特に、子どもの受け入れと引渡しの丁寧なやりとりの大切さがあげられる。

課題としては、運営費の問題があげられた。

### (3)親のエンパワーメントプログラム

#### ①みずべ

##### NPを応用したグループワーク

カナダの優れた親教育プログラムである「ノーバディズパーフェクト」と応用し、日本の実情に合わせた展開を行っている。日本での課題としては、自己表現が比較的控え目であることや、人とのコミュニケーションを不得手と感じる人が少なくない中での話し合いの実施であるので、そうしたことへの配慮が欠かせないということであった。毎回安心して話せるためには、保育の体制やその内容などもしっかりしたものにしなくてははいけなかった。また慣れてくるにしたがい、少し話しが上滑りしてしまったり、間隔が一ヶ月あいたのは少し長すぎたといった

ことも反省点で出ていた。あらためてただ話しをするということではなく、その中にあるファシリテーターの役割の重要さや難しさも垣間見えた。

#### 親たちの自主企画

ここでは一つのプログラムをとりあげるというよりも、自主企画全体についての報告がなさせ、それらの関係性が面白く興味もてる点である。企画を出しあうための基本的な関係作りから、運営会議といったシステム作り、そのような土台の上にたち、様々な企画の実施、といった何段階かのステップが見られる。また自分たちの活動との理念の整合性や思いのすりあわせなど、大事な配慮点がいくつもみうけられた。

#### ②くすくす

虫歯チェック、手作り子ども服、PC 教室、お花でティータイムの実践報告があった。親自身の資格や特技が生かせることによる社会参加の意義の大きさが報告された。

企画者だけの負担にならないようスタッフが声をかけたり、一緒に考えるなどの配慮点があげられた。

#### ③まんま

「スイーツ de ゆんたく」「親子でスローな夜を楽しもう」「産後ボディケア&フィットネス」「プチ工房」の実践報告があった。

利用者同士のつながりや、相互の預け合いが生まれる場としての意義もあげられた。

#### (4) 父親支援プログラム

##### ①びーのびーの

「父親の連続講座」の実践報告がなされた。全3回、土曜日に実施した。第1回は父と子(妻も参加可)で身体を動かして遊び、食事とビールでコミュニケーションをはかる。第2回は写真を持ち寄ってわが子と自分の子育てを話し合う場とした。第3回は一人の父親の子育て体験報告を中心にディスカッションを行ったとのことである。

この講座以降、父親のサークルが生まれる効果も見られた。しかし、仕事の関係で参加

の難しさがあるほか、父親の参加を促せない女性の側の意識の問題があるとの課題の提起もなされた。

##### ②わははネット

「日曜！パパのための子育てひろば」の報告がなされた。スタッフおよびひろばに来る父親が主催。日曜日の午前中、手遊び、親子体操、得意な父親による手作りおもちゃ紹介、交流会を行った。交流会では、土日の過ごし方、育児休暇、遊びに行く場所、ひろば利用などが話題となっている。

日曜日のひろば開館が父親参加の大きなきっかけとなるのがわかる。課題として、1回だけでなく月1回程度の継続性が必要。父親限定よりも家族参加の方がよい。父親が企画からイニシアチブをとる必要があることなどの課題があげられた。

#### (5) 学生の子育て支援プログラム

##### ①びーのびーの

「学生による家庭育児支援地域ネットワーク」の実践報告がなされた。大学生が夏休み期間に同じ子育て家庭に5日以上訪問し、子どもと遊んだり、短い時間の預かりをしたり、ちょっとした家事の手伝いをするなどの取り組みである。学生と家庭の個性や要望等を受けて丁寧なマッチングや事前研修を行う。実施期間も双方から報告を受け、スタッフはメールなどで受け答えをしている。

学生にとっても、親子にとっても非常に高い評価が得られている。課題としては、学生の交通費を全額負担できるようにすること、活動終了後の家庭と学生のつながりをサポートする体制の必要性があげられた。

##### ②みずべ 赤ちゃんプログラム

みずべに通っている親子に協力してもらい、みずべにボランティアとして参加している高校生を中心としたプログラムとした。一ヶ月ごとに4回連続とし、4ヶ月から7ヶ月まで月齢を追いながら、遊ぶことや泣くこと、赤ちゃんが表現していることを考えたり、成長を感じたりと高校生にとって貴重な体験となっている。今回はひろばの中での実施であるが、

学校へ赤ちゃんが出かけていくスタイルなども提案され、様々な形での実施が求められていることがわかる。

## (6) 中高年世代との交流プログラム

### ① びーのびーの

中高年世代が中心となるサポーターの活動および連絡会の報告がなされた。活動としては、日常的にひろばに入るほか、行事等への参加、託児、特技などを生かした交流などがある。

隔月 1 回行うサポーター連絡会では、親子や環境などへの気づきを意見として出してもらえたり、サポーターさん自身が自分の気になっていることを話すことによる負担感の軽減や運営スタッフとの共有の重要な機会となっている。しかし、サポーターもスタッフも人数が多いため、情報や意志の共有は大きな課題である。

### ② 手をつなご

中高年のボランティアグループから発足したひろばでもあるため、中高年ボランティアの参加がとても多い。希望する曜日や時間などに育児サポートにあたることが多い。スタッフの研修、交流会、育児講座などの行事にも参加する。また、自分の特技を生かした講座などを行うこともある。コーヒープレイクの時間などは、母親がお茶をしている間に子どもと遊んだりしている。

このような場の運営に対する財政的サポートが最大の課題とのことである。

## (7) アウトリーチプログラム

### ① みずべ

#### 出張ひろば

月二回みずべを拠点としながら地域への出張ひろばを開催。人口急増の地域で、施設の建設などが追いつかず、子育てインフラが足りていない中、出張のひろばは子育て中の親にとってとても助けとなっている。

みずべが核となり社会福祉協議会や子育て支援グループ、民生委員と協働し進めている点がポイントとしてあげられる。またボランティアも連れて行くのではなく、その地域で

募集をし、地域のつながりをつくるという機能もあわせもっている。

今後の課題としては運営の継続をどこが担っていくかということで、望ましいのは集まったボランティアが組織化し、運営をしていければよいが、月二回の関わりなので、組織としての意識が生まれにくいということがある。また社会福祉協議会や子育てセンターなどの大きな後ろ盾があるからこそ参加しているという人も多く、意識の持ち方などにも注目していく必要がある。

### ② まめっこ

親子教室として、外部の場を使い、年 3 回コースとしてそれぞれの場で午前中に実施している。内容は遊びとおやつとディスカッションとのことである。

課題としては、場所の確保の困難さがある。料金、交通手段、長期の利用などの条件を考慮した場を確保することが難しい。

## (8) ひろばでの相談

### ① びーのびーの

基本的には臨床心理士の専門家による相談日が位置づけられており、対応できない相談はそちらで対応している。グループ相談もあり、テーマを持って数人で座談会をもつこともある。電話の相談を位置づけているわけではないが、幼稚園選びや産院選びについての問い合わせもある。

## (9) 情報提供プログラム

### びーのびーの

「ひろばの情報コーナー」、「ココマップ」(インターネットサイトの制作・運営による地域情報の提供)、「幼稚園・保育園ガイド」、「広報紙」「ホームページ」の実践報告があげられている。

ここでは、多様な情報発信がなされていることがわかる。ひろば内の情報と、地域の情報との大きく 2 種類の情報が提供されている。特に、地域の情報発信をはじめ、地域のセンター的な機能をもちつつある。地域の情報発信、双方向性の情報、地域の子どもが育つ環境を考えるための発信(幼稚園・保

育園ガイド)などがこれからの重要な視点として考えられる。

#### (10)特別なニーズへの対応 くすくす

民家の2階ひろば事業に加えて、1階で児童デイサービスを行っており、ひろばの親子と0歳～小学校卒業までの障害をもった子どもの交流が行われている。日常的な交流に加え、交流を目的にしたキャンプなども実施している。その意義の大きさが報告されている。

課題としては、デイサービスの方は預かりが中心のため、親も含めたかかわりが少ない。そのため、親同士の関係も含めたかかわりの場を設けることが必要である。

#### (11)支援者の研修

##### ①びーのびーの

「スタッフ研修(みんなで話そう会)」および「ふりかえりミーティング」の実践報告があった。スタッフ研修は、年6回、2時間程度テーマを設けて、話し合いを行っている。テーマについては、アンケートを行い、その結果をもとに決定している。進め方においては、ファシリテーターが重要になる。その実施方法にも工夫がなされている。事務的運営的なミーティングのような話題へとすり替わっていかないような進め方などの配慮がある。

一方、「ふりかえりミーティング」は週1回行われている。何かを決定するための場ではなく、ひろばでの出来事について話す場となっている。正解を言うことではなく、自分の思いや考えを自由に話し、そのやりとりの中での気づきを大切にしている。

#### (12)企業との連携

##### ①みずべ

江東区内にある NEC ソフト(株)と連携し、社内での子育てに関する懇談会を企画。実際は参加者少数の為、開催が出来ないという結果となったが、交渉のプロセスや、企業の事情や成り立ちを理解する中で、進め方のノウハウ等を知ることが出来た。企業内風

土としてトップダウン形式で参加を募る場合や、ボトムアップ形式で社員のニーズにあわせ、必要とされている内容で進めるなどそれぞれの実情にあわせた展開が必要である。

##### ②びーのびーの

子ども未来ファンドの「子ども若者・その家庭を取り巻くさまざまな課題に対して取り組む常設の運営を支えるために企業・団体らの気持ちを寄付行為として集め、配分する」取り組みを報告している。具体的には、親子関連チャリティイベントを財団法人、社会福祉法人、地元企業等との連携を紹介している。このようなイベントを通じての連携(寄付集め)はそのテーマにより対象分野を限定することが可能となり、協力依頼はひろばへの直接的支援よりアプローチしやすいことが実証されたとのことである。そして、協力企業との連携のポイントが示された。

### 3) 児童館視察調査から

平成 15 年度調査研究の結果を踏まえ、先進的な児童館活動として京都市児童館の「子育て家庭への支援」や「児童に関する地域の活動センター」としての取組みに注目し、調査対象として訪問した。

#### ◆京都市の概況

古都・京都市の総人口は約 146 万人、平成 16 年には総人口に占める 15 歳未満の子どもの人口比率は 12.4%(18.1 万人)、高齢人口の 19.6%を下回る。合計特殊出生率では 1970 年代から既に全国平均より低く、平成 15 年度は 1.14 と他都市同様に子どもの人口は減少を続けている。そうした状況にあって、子どもをめぐる施策には京都が古くから培ってきた住民自治の伝統を自治会、社会福祉協議会、民生児童委員協議会等々を以って、地域からの発信を始めている。

#### ◆訪問の趣旨

京都市児童館はすべて社会福祉法人の運営である。各児童館は学童クラブを設置し、平成 16 年度には 101 館が放課後児童の育成を担っている。

平成 9 年には「みやこ(京)子どもいきいきプラン」の策定が、また平成 10 年からは地域子育て支援ステーション(子育て機関が連携しネット・ワークを組み相談・情報の発信を行なう)の役割を担う活動も開始している。「みやこ(京)いきいきプラン」の精神は①子供の人権を大切にする京都のまちづくり、②子どもが元気で伸び伸び育つ環境づくり、③子育て家庭への社会的支援を柱に、児童館は地域全ての子どもと家庭のウェルビーイングの促進を活動の基本目標に据えている。平成 14 年度に行なった中高生と赤ちゃん触合い交流事業を通し、職員の活動意欲の旺盛かつ多彩なアイデアも、京都市児童館訪問の理由である。

#### ◆京都市児童館と特徴

館全体のプログラムには、「子どもの遊びの復権」、「人権の尊重」、「ノーマライゼーションの推進」があり、活動指針テーマでもある。その他「幼児クラブ」「母親

クラブ」も同様に児童館活動には大きく位置付けられている。子育て家庭支援のニーズに対応した事業としては、「子育て相談」、「地域ふれあい事業」への方向性を目指した活動を模索していた時期でもあり、何れの児童館でも新しい事業の展開を試行している状況がうかがわれた。

「午後は小学生の利用が多いので、乳幼児親子は午前中が中心です」と、10時から 17 時までなら何時でも遊びに来ることは OK と呼びかけている。対象が 0 から 18 歳の児童館は曜日と時間の住み分けを上手く作りながら事業を展開しなければならないが、これを益とする方法をも思考している。

#### (1) 塔南の園児童館

##### 一地域に根ざした児童館活動一

観光で賑わう京都の中心部からは少し離れた南区、「東寺」のさらに南に位置する区画、高齢者の施設を共有した建物の 1 階スペースが塔南の園児童館であった。以下に活動の概要を紹介する

#### ①0・1・2・3の児童館

☆マタニティーヨガ

☆ベビーマッサージ(生後 6 ヶ月迄)\*1)

☆子育てママのアフターピクス

☆いっしょにあそぼう

☆ホッペクラブ(0・1歳)

☆にこにこクラブ(2歳以上)

#### ②自主グループ活動(母親クラブ)

☆まごあぐうす\*2)

☆Mam & Kids English(親子で英語を楽しむ会 1回 500円)

☆なっちゃんクラブ(おやつ作りの会)

#### ③中高生といっしょに\*3)

☆地域の中高生赤ちゃんが乳幼児親子とふれあう企画。(サンタ・プロジェクト等)  
☆お父さんも(一緒に遊べる機会を増やそう・・・年間日曜日数回)。

\*1)ベビーマッサージは、助産師の指導でお母さんが赤ちゃんの全身マッサージをする。気持ち良さそうな赤ちゃんを前にしながら、助産師さんは赤ちゃんをめぐる様々な親からの育児相談に与かる。終わった親子は夫々にお茶を飲み、お喋りにホットした

時を過している。幾つかの支援機能を一堂に展開しながら、孤立した子育てからの開放が図れそうなプログラムに成っている。

\*2)「まざあぐうす」とは、親自身がテーマを考えて活動。ペープサートから始め今に至る。小さな子どもは側に置きながら、或いはボランティアの手に守られての活動。現在はトールペイントを楽しんでいる。

\*3) 赤ちゃんととの交流事業で気づいたこと。2組の親子が来て話しをしてくれた。「赤ちゃんが生れて変わった自分を次の世代へ伝えること」で、親自身のセルフ・ヘルプGr.が生まれた。父親が興味をもつ親向け両親学級の方向性をいま模索中とだという。

\*4)館内・公園などで「一緒に遊ぼう会」を企画した。中高生を地域へどのように送りだせるか、中学・高校の家庭科教育とドッキングする方法もいろいろ考えられる。

#### ④児童館の自由来館制度

学童クラブに所属している児童以外の学童が自由に出入りができる制度で、学童クラブの友達との交流も可能としている。勿論親子での来館、子ども同士が自由に利用できるよう開放している。

#### ⑤よるの児童館(18:30~20:00) \*4)

児童館の案内に『よるの児童館』という記載がある。平成10年度に1年間助成金を受けた「中学生になって起す不適応行動」のモデル事業を契機とし始めたもの。今は毎月1回の開催。健全育成を目指す児童福祉施設である児童館で開催される『夜の児童館』活動は未だ珍しい。

\*4)コンビニの前にたむろする人間の居場所作りを意識的に演出する人として、普段の暮らしの中に位置付けることと考えた。『赤ちゃんふれあい交流事業』では「よるの児童館」の大学生ボランティアが、中高生と共に楽しい活動を生んでいる。

### (2) 嵯峨野児童館

ー地域住民との協働をめざして

京都市右京区にある比較的新しい児童館、市内でも人口が減少の地域である。児童館活動のテーマは、先の館と同じであるが、行事や館独自のプログラムには

個性を持たせている。

①0・1・2・3児童館、②母親クラブ等の他、③アート教室(切り絵)、手話にもチャレンジ。

☆読み聞かせは嵯峨野児童館の独自プログラムと位置付けている。

④自由来館制度は、⑤のおやつデーにマッチし、近隣にも好評を得ている。

⑤駄菓子やさん(おやつデー)の企画は地域住民との協働がテーマの活動。15年度開始だが1年間に学童クラブ(1~3年生)の子ども665名に対し1000人が自由来館を利用している。年長小学生も400人程度来館、駄菓子と友達遊びと街に住む近隣の交流がテーマ。\*5)

⑥やんちゃフェスタへの参加\*6)

\*5)京都市児童館活動指針へ近づけるための工夫の一つで地域住民のボランティアが「売り屋さん」として参加する。今や失われつつある店の売り手・買い手のふれ合いや喜び、加えて地域住民の児童館への関心をも高める効果が期待できる。

\*6)京都児童館学童連盟が平成3年から開催している児童館・学童保育所むけ年1回のお祭り。遊びを通して大切な子どもの時間や空間を仲間と共有を図る主旨である。

#### ◆まとめ

地域に根ざした児童館活動には、地域住民の参加から生れる協働が必要であるという考え方は一般化している。それをどのように実践していくかについて、「塔南の園」児童館長・中川左知さんは、実践を基盤とした館の抱負を語ってくれた。その一部をここに記しておきたい。

「種々あるニーズを職務に結び付けても、お互い相互性がなければ、繋がり、育ちあう事はできない。コミュニティワーク、ケースワーク、ケアワーク、ソーシャルワーク、あらゆる援助技術の循環性をもって、有機的に結び合わせるコーディネイト力がこれからの児童館運営には求められる。児童館が「子どものたまり場」程度の認識でなく、インタージェネレーションを啓蒙してゆく時代にきている」と。



## 2. 子ども家庭支援プログラムの提案

今年度は、昨年度の研究において提案を行った子ども家庭支援プログラムを基盤に、そのプログラムの実践を行い、検証を行った。その検証を通して、プログラムの再編を行った。実際にかなり実践されている内容のプログラムもあれば、まったく新しいプログラムもある。今後、ここに提案されたプログラムが各地域で実践されることが望まれる。ただ、どのようなプログラムを行うにあたって、それが子ども、家庭、地域、子育て環境全体にとって質的充実をとまなうものであるかどうかがとても重要である。その点に配慮しながら、今回の再編を行った。

なお、ひろば等でこれらのプログラム実施する場合は、1)にふれるノンプログラムのひろばが、日常的にあること、そこで安心して何もしなくてもよい場が保障されての上で、必要に応じて行っていただきたいと考える。他のさまざまな機会において、単発で実施できるプログラムの利用についてはこの限りではないし、趣旨を汲み取っていただいた上で、実践の中で参考にさせていただければ幸いである。

### 1) 常設でノンプログラムの「ひろば」

#### (1) 常設であること

国の「つどいの広場」における広場とは週3日以上以上の開設が条件になっている。乳幼児を連れての外出は、大人の外出とは違って手間がかかり、心身の条件に左右されて予定や日時を合わせることもままならない。時間限定ではなく、いつでも行けるときに開いていることが大切である。そのためにはひろばが常設であることが望ましい。

当初、「子育て支援」と考えられて実施されてきたことは、親子が集まって何か楽しいことをする、託児つきで有意義な話を聞く—この場合は子どもとはなれて

大人の場合にいられるというメリットがあった—などであった。つまり時間限定のイベント型であったことは否めない。

常設であるほど、そこでいつも何かをやっていることは難しくなることが考えられる。人を集める、親子に来てもらうためには、何かをやらなければならないのがこれまでの考え方であったし、利用者側もイベント型に慣れていて、何かをやってもらうことを期待して一時の楽しみを求めて渡り歩くこともあったと聞く。

常設のひろばは、一時の楽しみを与えるだけの場ではない。そこに来て、居ることそのことに価値がある、というような場となることが大切である。乳幼児の親子が好きな時間、居られる場のあり方の検討が求められる。

#### (2) ノンプログラムとは

ノンプログラムとは、とくにプログラムを設定しないで、自由に過ごしてもらうことといえる。ひろばには、安全に配慮され、自由に使える設備、おもちゃや空間があつて、どこで何をするかは自由である。好きな時間に来て、帰りたいときに帰ることができる。

ひろばにきて何をするか、時々設定されるプログラムめがけてくる日以外には、とくに目的はなくてもよい。家で二人きりで煮詰まることから開放され、いろいろな人と出会うことができる。はじめはわが子しか見えなかった親が、よその子どもにも目が向くようになって、気になっていることがわが子だけのことではないと知ることもある。他の親の話をそれとなく聞き、子どもへの接し方を見て学ぶことも多い。

子どももよその子どもと一緒に遊ばなくても、見ている、真似をするだけでも楽しく、意味があることがある。今できないことでも、できるようになったら始めるために、予習をしているのである。

ノンプログラムのひろばでは何よりも自由で、好きなように過ごすことができる。イベントで何かすることが決められ

ていると、やりたくないことも一緒にしなければならぬ。それが終わって、もっと居たくても帰らなければならない。他者のペースに合わせる事が多く、自分のペースで自分なりにするわけにはいかないことが多い。

与えられることに慣れた人の中には自分が何をしたいのかが分からずに、何もしてもらえなかったと嘆く人もいる。いつも何かを与えられて、やった気持ちになっている人は、指示されないことで不安になる人もいる。ノンプログラムに慣れない人ははじめ戸惑うようだ。しかし慣れてくると、自分が望んでいることが何かを見つけ、その中で自分なりの過ごし方をする事の心地よさを知るようになっていくようだ。それは、実際にこのようなノンプログラムを実施している利用者のアンケート調査からも明らかである。

ただし、ここでいうノンプログラムとは、まったく意図的なプログラムを提供しないということではない。例えば、一日の中に、絵本や紙芝居、パネルシアターなどをちょっと集まってみる時間がある。親同士が少しテーマをもって話し合うことを企画する。雨がずっと降っていて少し子どもが発散できていないようなので親子でちょっと身体を動かすような遊びを提案してみる。など等、状況に応じて意図的なプログラムを提供していることはむしろ不可欠なことである。多くのひろばではスポットタイムが入れられていたり、予定外の活動が盛り上がりすぎるのはそのためである。ここが十分に理解されないと、ノンプログラムは十分に機能しないと考えられる。

### (3) 環境設定

ハード面では、気持ちよく清潔で、子どもが安全に遊べる広さや設備、おもちゃ、絵本などが揃っていることがまずは必要である。親にとってはゆっくりとくつろげて、子どもの世話が楽にできる設備、おむつ交換や授乳のコーナー、持参

の食事や茶の準備もできるキッチン、昼寝がさせられる静かなスペースなどが必要である。大人同士が心置きなくおしゃべりできるソファやテーブルがあれば、子どもを見守りながらゆっくりできる。床は滑らず、カーペットや畳のコーナーや部屋があればくつろぎやすいだろう。

親子にとって本当に過ごしやすい環境をつくることは、非常に重要なことである。絵本やおもちゃの選択をどう行うか、遊びのコーナーをどのように作るか、少し大きめの子どもが動きやすい場と赤ちゃんが静かに遊べる場をどう作っていくか。あるいは、親がゆっくりできるような場をどう作るかなど、そのひろばによる力量が大きく見えるところでもある。

ひろばの環境のあり方については、別の研究で示したので、ここには詳しく載せないが、そちらを参照してほしい。

### (4) 情報を得る場

子育てに必要な情報が得られるよう、壁の掲示や資料がそろっていることが望ましい。スタッフの手をわずらわせなくても、来たときに必要な情報を手に入れられるように、情報が整理して置かれていると親も探しやすい。親たちが、何人かでおしゃべりする中で互いに役に立つ知識や情報を得ることもある。

親が関心を持ちそうな本を用意しておく、家ではなかなかできない読書を楽しむこともできるが、あまり没頭してしまつて子どもを忘れない程度のものにした。親子で楽しめる絵本があれば、子どもとコミュニケーションをとるよい機会にもなる。

### (5) 人の中で学ぶ

ひろばは出会いの場である。居心地のよい空間で親も子も人と出会うことに大きな意味がある。子ども同士、親同士が友達になるきっかけを得ることも多い。

子ども同士が出会い、遊び、まねをしたり教わったり、物のやり取りをし、逆に取り合ったりする。やったりやられた

りして、楽しいことやいやなこと、悔しいことも経験する。痛い目にあえば手加減することも覚えるだろう。どのくらいやってもよいのか、程よく見守ってくれる大人がいれば、互角に向き合って相手との距離のとり方も分かっていく。

子ども同士のトラブルは親にとっても試練である。それを避けて子どもたちをすぐに引き離すだけでは子ども同士の関係は育たない。子どもに任せてしばらくは静観する姿勢が、親にも必要である。親同士が子どもたちにどうかかわっていくのか、互いに了解していく雰囲気を作っていく必要がある。親同士が育ちあうために必要なことである。ひろばでの日常的な場面でのこうしたかかわりは、人とのかかわりを学ぶ貴重な場であるといえる。

#### (6) スタッフの役割

ひろばでの人のかかわりを見守り、雰囲気を作るのはスタッフの役割である。ノンプログラムの中では、親の目の前で適切な対応をするモデルでなくてはならない。ノンプログラムの中で、スタッフは何もしていないように見えるが、気遣いはしている。目立たず、全体を見渡し、どこで何が必要かを判断し、適切な対応をするファシリテーターの役を執るスタッフの存在は欠かせない。

来ている親子それぞれが何を求めているか、何が必要かに気づく感性と、そのニーズに応える供えを持っていることが求められる。深い自己研鑽が求められる存在なのである。

このスタッフの存在がひろばの充実の大きな鍵になることは言うまでもない。この点については、Ⅲ 3. 3) の子育て支援者の役割として別に項目を設けて記述したので、そちらを参照いただきたい。

## 2) プレママ・マタニティー

### 趣旨

現在出産をするまで赤ちゃんに触れたり、抱いたりした経験や世話をした体験をもたないまま、始めての出産、育児をする女性が増えており、多数の女性がそのような状況であろうと考えられる。

特にはじめての出産の場合、赤ちゃんが生まれてからのことは、わからないことや心配なことが多く、いつでも話をきいてくれ、適切なアドバイスがもらえる場が必要である。そこに行けば先輩ママや専門家がいて気軽に相談できるという場があれば、気が楽になり、安心できるのである。

### 目的

出産前に実際に赤ちゃんとおふれあい、子どもと関わる体験をしてみることで、「子ども」というものの実感をもつ。また子どもの世話をしている新米の母親（プレママにとっては先輩になる）の話も見聞きしながら、家庭の中で子どもと二人だけの生活ではなく、他の母親や地域の人、専門家やボランティアたちに見守られ、かかわりを持ちながら子育てをしていくことを体験する。仲間がたくさんいること、決してひとりではないことを感じとってもらうことが、本プログラムの目的となる。

### (1) 日常的なひろば体験

#### 実施方法

##### ① 対象

出産を控えた妊婦とその夫

##### ② 募集

主に保健所・保健センターで行われている両親学級などで広報し、勧誘を行う。「赤ちゃん誕生をひろばのみんなが楽しみに待っています。遊びにきてください。出産前後、困ったこと、心配なことについては先輩ママ、スタッフ、子育てのパ

ートナーとなるボランティアさんがいつでもお待ちしております。赤ちゃんのお誕生前に赤ちゃんを身近に感じ、一緒に遊んだり、先輩のお母さん方から、あんな時こんな時のお話を一緒にしてみましよう。」といったお知らせを作成しておく。

できれば直接ひろばスタッフが両親学級に出向き説明をする。地域に共に育てあうひろばがあることと、ひろばの活動内容をお知らせする。

また地域の産婦人科を回り、ひろばの案内パンフレットと共にプレママのひろば体験へのお誘いチラシをおいてもらう。

### ③ 開催

基本的に来所はいつでも可とする。しかし、プレママ同士の交流や知り合う機会ともなるので、月に1回～2回程度日を設定したりおしゃべりタイムのようなものを作ったり、きやすくするきっかけを作る。

### ④ 活動の進め方

あそびのひろばの中に自由に入ってもらい、他の親子と身近に接する。

スタッフあるいはボランティアが案内をし、必要と思われるプレママには、一緒に寄り添いながら他の親子を紹介し、赤ちゃんを抱くなどの体験をしてもらう。

⑤ 帰りの際には、プレママひろば体験の感想を短時間でもよいので、スタッフ、ボランティアと共に懇談し、皆で出産を待ち望んでおり、子どもと一緒にの来所を楽しみにしていることを伝える。

⑥ 一回だけの参加で終わるのではなく、フォローアップとして継続的につながりがもてる様、出産前でも参加出来るプログラム（例：赤ちゃんマッサージ、お話し会など）があれば参加を誘ったり、ひろばのお知らせを郵送していく。